

## 藍澤南城田園詩訳注稿(二)

村山 敬三

### まえがき

本訳註は本誌前号に続くものである。底本は新潟県立図書館蔵の『南城山人三餘集』（全十七巻、自筆稿本）である。そのことを含めて、凡例は前号に示したとおりである。今回訳注を試みた作品は『南城山人三餘集』（以下「三餘集」と略す）の巻七から巻十までの四巻から選んだ。この四巻に特定した理由は特になく、結果としてそうなたに過ぎない。巻七から巻十は南城五十三歳から五十六歳のころの作品かと思われる。弘化元年から弘化四年にあたる。南城の私塾三餘堂は、農村地域（現在の新潟県柏崎市南条）にあった。南城は三餘堂での教育のかたわら付近の村や山をよく歩き、多くの田園詩を作っている。

○ 孟夏朔遊山。山菜方剛、猶有可采。（孟夏朔は山に遊ぶ。山菜方に剛けれど、猶ほ采るべき有り。）その一  
〔巻七〕

紫萁脱帽蕨開拳

紫萁せんまい帽を脱し、蕨わらび拳を開く。

柔者方剛濯濯山

柔まろき者方に剛こはし、濯たくたく濯たる山。

夷齊拙矣當年餓

夷齊は拙し、當年の餓ゑ。

嫩葉應無不可餐

嫩葉應に餐ふべからざる無かるべし。

〔用通韻〕

(脚韻上平声一五刪、山 上平声十四寒、餐 通押)

【語注】

。紫萁脱帽蕨開拳：「紫萁」はぜんまい。「脱帽」はかぶりものをぬぐこと。南宋、楊万里の「初食笋蕨（初

めて笋蕨を食ふ）」に「包鳳烹龍世浪傳 猩脣熊掌我無緣 只逢笋蕨杯盤日 便是山林富貴天 穉子玉膚新

脱錦 小兒紫臂未開拳 只嫌嶺外無珍饌 一味春蔬不直錢（鳳を包、龍を烹るは世浪の傳、猩脣熊掌は我に

縁無し。只笋蕨杯盤の日に逢ふは、便ち是れ山林富貴の天。穉子玉膚新たに錦を脱ぎ、小兒紫臂未だ拳を開

かず。只嶺外に珍饌無きを嫌ふ。一たび春蔬を味へば錢に直らず。」とある。

。柔者方剛濯濯山：「剛」はかたい。「濯濯」は光り輝くさま。『毛詩』大雅「崧高」に「四牡躑躑 鉤膺濯濯

（四牡躑躑として、鉤膺濯濯たり。）、毛傳に「濯濯、光明也（濯濯は、光明なり。）」とある。「孟夏」は陰

曆の四月、山菜を採るにはもう遅い。

。夷齊拙矣當年餓：「夷齊」は伯夷と叔斉の兄弟。「當年」はその頃、当時。伯夷と叔斉は武王の殷討伐に反

対して周のものを食はず、首陽山に住んで薇をとって食べた。『史記』伯夷列伝に「天下宗周、而伯夷叔齊

恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之。（天下周を宗として、伯夷叔斉之を恥ぢ、義として周の粟を

食せず、首陽山に隠れ、薇を采りて之を食ふ。）」などとある。

。嫩葉：草木の若葉。

【現代語訳】

初夏、月の第一日めに山に遊ぶ。山菜は固い。それでも採ってよいものはある。その一

ぜんまいはかぶりものを脱ぎ、蕨はこぶしを開いている。

柔らかいものが今はもう固くなっている、日の光が強くなった山では。

伯夷と叔斉は愚かだった、彼らはその当時餓えてしまったのだが。

木の若葉には食べられるものがあるのだよ。

孟夏朔遊山。山菜方剛、猶有可采。その二

凶年草食泣山民 凶年草食、山民を泣かしむ。

摘盡萌芽纔度春 萌芽を摘盡して纔に春を度る。

今日采蕨陵上望 今日蕨を採りて陵上に望めば、

午炊煙盛不知貧 午炊の煙は盛んにして貧を知らず。

(脚韻上平声一一真、民・春・貧)

【語注】

。草食：草を食う。飢えて食なきものにいう。『後漢書』列傳第二十九、王望傳に「望行部、道見飢者。裸行草食、五百餘人。(望、部を行、道に飢ゑたる者を見る。裸にて行き草食すること、五百餘人なり。)」とある。

。萌芽：出たばかりの芽。めばえ。

。度春：春の日を過ごす。唐、楊凝の「春怨」に「花滿簾櫳欲度春此時夫婿在咸秦綠窗孤寢難成寐紫燕雙飛似弄人（花、簾櫳に滿ち春を度らんと欲す。此の時夫婿咸秦に在り。綠窗孤寢、寐を成し難し。紫燕雙飛して人を弄するに似たり。）」とある。

。不知貧：秦系の「山中書懷寄張建封大夫（山中に書して懷ひを張建封大夫に寄す）」に「昨日年催白髮新身如麋鹿不知貧（昨日年催して白髮新たに、身麋鹿のごとく貧を知らず。）」とある。

### 【現代語訳】

初夏、月の第一日めに山に遊ぶ。山菜は固い。それでも採ってよいものはある。 その二

不作の年は食べるものもなく山民を泣かせる。

出たばかりの芽を摘み取ってやっと春を過ごす。

今日蕨を採って丘の上から眺めてみると、

午炊の煙はたくさん上がってまるで貧苦などないようだ。

孟夏朔遊山。山菜方剛、猶有可采。 その三

吾徒元是惰游身 吾が徒元是れ惰游の身、

聊摘山蔬矜外人 聊か山蔬を摘みて外人に矜る。

采采不遑論好惡

采采好惡を論ずるに遑あらず。

瘠薇癯蕨櫛來頻

瘠薇癯蕨、櫛み來りて頻りなり。

(脚韻上平声一一真、身・人・頻)

【語注】

。吾徒元是惰游身：「徒」は仲間、ともがら。「吾徒」は、自分と私塾三餘堂で学ぶ人々を含めて言う。「惰游」は、おこたり遊ぶ。怠け遊ぶ。「禮記」玉藻に「垂綏五寸、惰游之士也。(垂綏五寸は、惰游の士なり。)」注に「惰游、罷民也(惰游とは、罷民なり。)」とある。南城には尊農思想があり、儒学を学ぶ自分たちよりも農民の方を貴いと考えている。南城の「尊農」については、拙稿「『農』と学問―藍澤南城の教育―」(『斯文』第一三〇号、斯文会、二〇一七年)参照。

。聊：とりあえずは。なんとか。しばらくの間。

。山蔬：山中の野菜。

。外人：外部の人。ある集団や範囲外の人。東晉、陶淵明の「桃花源記」に「男女衣著、悉如外人。(男女の衣著、悉く外人のごとし。)」また「不足爲外人道也。(外人の爲に道ふに足らざるなり。)」とある。

。采采：どんどん取る、次々と取る。『毛詩』周南「采芣苢」に「采采芣苢 薄言采之(芣苢を採り採り、薄か言に之を採る。)、また同じく「卷耳」に「采采卷耳 不盈頃筐(卷耳を採り採る、頃筐に盈たず。)」とある。

。瘠薇癯蕨：「瘠」「癯」は、いずれもやせるの意。やせた蕨。

。櫛來頻：「櫛」はつまばさむ。服の前の部分で物をつつむ。服につつむ。『毛詩』周南「采芣苢」に「采采芣苢 薄言櫛之(芣苢を採り採り、薄か言に之を櫛む。)」とある。

【現代語訳】

初夏、月の第一日めに山に遊ぶ。山菜は固い。それでも採ってよいものはある。その三

自分たちはもともと忘れ遊んでいる身分、

いささか山菜を採ることを他のひとに自負している。

ひたすら採って好き嫌いを言っている暇はない。

やせた蕨をどんどん服に入れてゆく。

○ 自五月二十八日不雨、至七月十二日沛然傾盆、喜而賦。(五月二十八日より雨ふらず、七月十二日に至り沛

然として盆を傾く、喜びて賦す。) その一〔卷七〕

夏天炎早到秋天

夏天炎早、秋天に到る。

一脈纔餘山下泉

一脈纔に餘す、山下の泉。

〔泉自八石出久旱不涸〕

〔泉、八谷より出づ。久旱にも涸れず。〕

村中分配交相灌

村中分配し、交々相灌ぐ。

四百三十二段田

四百三十二段の田。

〔南條村八百六十五石、田數四百三十二段〕

〔南條村八百六十五石、田の數、四百三十二段。〕

（脚韻下平声一先、天・泉・田）

【語注】

。傾盆：水鉢を覆す。雨の烈しく降る形容。覆盆。

。夏天炎旱到秋天：「炎旱」はひでり。「秋」は秋の日。夏の日照りが秋になっても続いている。

。一脈纒餘山下泉：「一脈」はひとすじ。「纒」はやつと。かろうじて。「山下泉」は山の麓のいずみ。水の

わき出るもと。水源。皇甫曾の「山下泉」では「漾漾帶山光 澄澄倒林影 那知石上喧 却憶山中靜（漾漾

として山光を帶び、澄澄として林影倒る。那ぞ知らん、石上の喧しきを。却つて憶ゆ、山中の靜かなるを。）」

と詠われている。山から流れ出るひとすじの水源が、かろうじて残っていた。

。八谷：山の名。現在は八石山はちこくざんと書く。標高五一八米。南城の私塾三餘堂は、この八石山の麓に建てられてい

た。

【現代語訳】

五月二十八日から雨が降らず、七月十二日になって水鉢を覆したように雨が激しく降り出した、喜んで作っ

た。その一

夏の日のひでりは秋にまで続いた。

山のふもとの水源は、かろうじてひとすじ残っていた。

〔泉は八石山はちこくざんから出ている。長日照りにも涸れなかった。〕

村中で分配し、お互いに水を流し込んだ。

四百三十二段の田に。

〔南條村は八百六十五石で、田の数は四百三十二段である。〕

自五月二十八日不雨、至七月十二日沛然傾盆、喜而賦。その二

西來涼雨滌炎暉

西來涼雨、炎暉を滌ふ。

赤地死蔬魂復歸

赤地の死蔬、魂復た歸る。

蕨苗含緑槿花茂

蕨苗緑を含みて槿花茂し。

瓠葉舒青茄子肥

瓠葉青を舒して茄子肥ゆ。

(脚韻上平声五微、暉・歸・肥)

【語注】

。西來…秋になつての意。「西」は四時では秋に配当される。詩題に「七月十二日」とあり、これは旧曆の初秋である。

。炎暉…日の光の暑いこと。暑い日のひかり。三國魏、王粲の「公讌詩」に「涼風撤蒸暑清雲卻炎暉（涼風蒸暑を撤り、清雲炎暉を卻く）」とある。

。赤地…土地が丸裸になる。早魃で地上の草木が皆なくなる。

。死蔬…「蔬」は野菜として食用にできる食物。

。魂復歸…生き返る。



。蕨苗…「蕨」はだいこん。「苗」ははえたばかりの植物。

。槿花…綿の木。花の繊維から綿をとる。

。瓠葉…瓠はひさご。フクベ、ヒヨウタンの一種。

。肥…食べ頃だ。たっぷり膨らむ。

### 【現代語訳】

五月二十八日から雨がふらず、七月十二日になって水鉢を覆したように雨が激しく降り出した、喜んで作った。その二

秋になり涼しい雨が降ってきて、暑い日の光を洗ってくれた。

草木も枯れた地面の野菜もまたよみがえった。

大根は緑を含み、綿の花はたくさんついている。

ひさごの葉は青々とした葉を伸ばし、茄子はたっぷり膨らんでいる。

### ○ 観農家園有感（農家の園を観て感有り）〔巻八〕

路傍農屋兩三家

路傍の農屋、兩三家、

流水激庭皆種花

流水、庭を激して皆花を種。

紫荊櫻草紅開落

紫荊櫻草、紅開落、

碧毬枝上掛風車

碧毬の枝上に風車を掛く。

我過此間暫憩軒

我此の間を過り、暫く軒に憩ふ。

景致多於名勝園

景致、名勝の園よりも多し。

農夫何識經營巧

農夫何ぞ識らん、經營の巧。

園趣從來出偶然

園趣從來、偶然に出づ。

觀之消盡豪華念

之を觀して消し盡く、豪華の念。

綺石珍卉却不尊

綺石珍卉、却つて尊からず。

我亦屋前蔬茹圃

我も亦屋前蔬茹の圃、

四圍菓木代籬樊

四圍の菓木、籬樊に代ふ。

或勸可少加粧點

或いは勸む、少しく粧點を加ふべしと。

我嫌過分未敢然

我過分を嫌ひて未だ敢て然せず、

今日此間全自了

今日此の間、全く自ら了る。

玄黃華麗不如純

玄黃華麗は純に如かず。

【語注】

○韻字 家・花・車（麻韻）、軒園然尊樊然純（元韻、先韻、真韻、通押）

。激庭…「激」は一氣にどつと流すために、水をせきとめる、

。紫荊…樹木の名。すほう。ハナズオウ。

。開落…花の開くことと落ちること。咲いたり散つたり。

。碧毬枝上掛風車：「碧」はみどり、青綠色。「毬」はまり。「三余集」頭注に「旋覆花俗名風車（旋覆花は俗名風車）」とある。「旋覆花」はオグルマ（小車）のこと。

。閭：さと、村落。

。景致：山水風物などのおもむき。風致。景趣。

。經營：家屋を新築するとき、土地をはかって土台を据えること。『尚書』召誥に「厥既得卜、則經營。（厥れ既に卜を得、則ち經營す。）」とある。

。綺石：うつくしい石。

。蔬茹圃：蔬茹は野菜のゆでもの、菜食をいう。

。粧點：かざりたてる、めかす。裝飾をほどこす。

。玄黃華麗：「玄黃」は美しい色、「華麗」はなやかで美しい。『孔子家語』卷四に「夫釐王變文武之制、而作玄黃華麗之飾、宮室崇峻、輿馬奢侈、而弗可振也。（夫れ釐王は文武の制を變じて、玄黃華麗の飾を作り、宮室は崇峻、輿馬は奢侈にして、振ふべからざるなり。）」とある。

### 【現代語訳】

農家の庭を見て

道ばたの農家の二三軒、

川の流れを庭でせき止め、どの家も花を植えている。

ハナズオウや桜草の紅い花が咲いたり散ったりしている。

オグルマは緑の毛玉をつけた枝の上には風車を掛けている。

私はこの集落に立ち寄り、しばらく軒下で休んだ。

庭の風趣は名勝の庭園にまさっている。

農夫は庭の設計などどうして知ろうか。

園趣はもともと偶然から出たものだ。

この庭を見ていると豪華に飾ろうとする気持ちはすっかりなくなる。

きれいな石や珍しい草花はかえって尊さを感じない。

私も家の前に野菜畑がある。

四方の周りは果物のなる木があつて垣根の代わりにしている。

もう少し飾ってもいいのではと勧められることもある。

私は分に過ぎるのが嫌なので今まで無理にはしていなかった。

今日こうして見ていて全く自分で悟った。

美しい色や華美は自然のままであることに及ばないと。

○ 山寺見芍薬（山寺に芍薬を見る）〔卷八〕

昔入鄭風溱洧吟

昔入る、鄭風溱洧の吟。

如今植在貝多林

如今植じよこんして貝多林ばいたりんに在り。

莫爲綽約嬌柔態

綽約嬌柔しやくやくけうじゆうの態を爲すこと莫かれ。

菩薩恐牽煩惱心

菩薩恐らくは牽かん、煩惱の心。

(脚韻下平声十二侵、吟・林・心)

【語注】

。溱洧吟：「溱洧しんがい」は『毛詩』鄭風の篇名。溱洧には「維士與女 伊其相謔 贈之以勺藥(維れ士と女と、伊れ其れ相謔れ、之に贈るに勺藥を以てす)」と芍藥が詠われている。

。如今：今の世、ただいま。現世。

。貝多林：仏教のこと。貝多は樹木の名、印度に産す。その葉を水に漚ひたし、紙の代用にして経を写す。『新唐書』列傳第一百四十六上、西域上「天竺」に「有文字、善步曆、學悉曇章、妄曰梵天法。書貝多葉以記事。(文字有り、步曆を善くし、悉曇の章を學び、妄に梵天法と曰ふ。貝多の葉に書して以て事を記す。)」とある。

。綽約：柔弱なさま。しとやかなさま。『莊子』逍遙遊に「肌膚若冰雪、綽約若處子。(肌膚は冰雪のごとく、綽約として處子のごとし。)」、また白居易「長恨歌」に「樓閣玲瓏五雲起 其中綽約多仙子(樓閣は玲瓏として五雲起こり、其中の中綽約として仙子多し。)」とある。

。嬌柔：なまめかしくやわらか。金、元好問の「楊柳」に「楊柳青青沟水流 鶯兒調舌弄嬌柔(楊柳青青として、溝水流る。鶯兒調舌、嬌柔を弄す。)」とある。

【現代語訳】

山寺で芍薬を見る

『毛詩』鄭風の「溱洧」に詠われたものが、昔日本に入ってきた。

今の世、仏寺の林に植えられている。

しとやかでなまめかしい姿を見せてはいけないよ。

菩薩様はきつと煩惱の心に牽かれてしまうだろうから。

○ 聞蛙（蛙を聞く）〔卷八〕

故城南北盡公田 故城の南北、盡く公田、

水満蝦蟇聲譟天 水満ちて蝦蟇の聲、天に譟ぐ。

只是爲官鳴促耦 只是れ官の爲に鳴きて耦を促す。

私畚蕪穢不遑佃 私畚蕪穢して佃るに遑あらず。

（脚韻下平声一先、田・天・佃）

【語注】

。故城…ふるい城。三餘堂の近くに平山城の南条毛利館があつた。

。公田…公的機関が管理、耕営する田。税金を納めるため、共同で耕す田。

。諫天：「諫」は群衆が大声ではやす。ガマの聲が空に騒がしく響くようす。  
。耦：二人並んで畑仕事をする。ここでは仲間と一緒に公田を耕す。  
。私畚：個人の田。「畚」は新たに開墾して三年たった耕作地。『周易』无妄むぼうに「不耕穫、不菑畚、則利有攸往。  
(耕さずして穫り、菑せずして畚あり。則ち往く攸有るに利し。)」とある。  
。蕪穢：土地が荒れて雑草が茂る。『楚辭』九弁に「農夫輟耕而容與兮 恐田野之蕪穢(農夫耕を輟めて容與し、  
田野の蕪穢せんことを恐る。)」とある。

### 【現代語訳】

蛙を聞く

古い城の南北はみな公田である。

田には水が満ちて暮の聲が空に騒がしい。

これはもうお上のためだけに鳴いて、早く仲間と田を耕せと催促しているのだ。

個人の田は荒れているからそんな暇はないのだよ。

○ 五日偶作(五日偶々作る) [卷八]

酒旆店前菖葉青

酒旆しゅはいの店前しやうえふ、菖葉青し。

惰農羣飲百劉伶

だのう 惰農羣飲す、百劉伶。

醉歸處處荷鋤倒

すゐき 醉歸し處處に鋤を荷ひて倒る。

誰識傍觀我獨醒

誰か識らん、傍觀我獨り醒めたるを。

(脚韻下平声九青、青・伶・醒)

【語注】

。酒旆：酒屋のはた。酒旗。

。惰農：なまける農夫、怠惰な農夫。

。劉伶：晋、沛国の人。竹林の七賢の一人。酒を好み「劉伶病酒」の故事がある。『晋書』列傳第十九、劉伶伝に「伶跪祝曰、天生劉伶、以酒爲名。一飲一斛、五斗解醒。婦兒之言、慎不可聽。仍引酒御肉、隗然復醉。(伶跪祝して曰く、『天劉伶を生むに、酒を以て名と爲す。一飲一斛、五斗醒を解く。婦兒の言は、慎んで聽くべからず。』と。仍ち酒を引ききて肉を御し、隗然として復た醉ふ。)」などとある。

。醉歸處處荷鋤倒：「醉歸」は酔つて帰る。『毛詩』魯頌「有駉」に「鼓咽咽 醉言歸(鼓すること咽咽として、酔ひて言に歸る。)」とある。また、蘇軾の「吉祥寺賞牡丹(吉祥寺にて牡丹を賞す)」にも、「醉歸扶路人應笑(醉歸、路に扶けらるれば人應に笑ふべし)」とある。「荷鋤」は陶淵明の「歸園田居(園田の居に歸る)」に「種豆南山下 草盛豆苗稀 晨興理荒穢 帶月荷鋤歸(豆を南山の下に種ゑ、草、豆苗を盛ること稀に、晨に興き荒穢を理め、月を帶び鋤を荷ひて歸る。)」とある。この詩では「鋤を荷ひて」が「倒る」に続いてある。陶淵明の詩の興趣を逆に利用してユーモアを考えた表現。

。我獨醒：『楚辭』漁父第七に「舉世皆濁、我獨清。衆人皆醉、我獨醒。(世を舉げて皆濁り、我獨り清めり。



衆人皆酔ひ、我獨り醒めたり。」とある。

【現代語訳】

五日、たまたまの作

酒屋の旗がひるがえる店の前、菖蒲の葉は青々としている。

怠け者の農夫が群れて酒を飲んで、大勢いるねエ劉伶が。

酔つ払って帰る道すがら、あっちこっちで鋤を背負って倒れている。

でも誰も知らないだろう、傍観者の私だけが醒めているということ。

○ 雨後（雨後）〔卷八〕

待雨稲苗移未全 雨を待ちて稲苗移すこと、未だ全からず。

滂沱一夕水川川 滂沱一夕、水川川。

朝駭農功神速甚 朝に駭く、農功神速の甚だしきを。

天涯無處不青田 天涯處として青田ならざるは無し。

（脚韻下平声一先、全・川・田）

【語注】

。滂沱一夕水川川：「滂沱」は大雨の降るさま。『毛詩』小雅「漸漸さんさん之石しせき」に「月離于畢俾滂沱矣（月、畢に離り、滂沱たらしむ。）」、箋に「將有大雨、微氣先見於天。（將に大雨有らんとし、微氣先づ天に見ゆ。）」とある。「一夕」はひとばん、ある夜。『左伝』哀公八年に「吳子聞之、一夕三遷。（吳子之を聞き、一夕に三たび遷る。）」とある。ここでは、突然夕立がやって来たというようす。「川川」は、通常は大きい車などの、おもおもしろく遅いさま。揚雄の『太玄經』難に「大車川川、上駘さまた于山、下触于川。（大車川川たり、上山に駘さまたげられ、下川しもに触る。）」とある。ここでは、水が増えて多くなるようす。

。朝駘農功神速甚：「農功」耕作のわざ。農事。「神速」は非常な速さ。迅速。『史記』酷吏列伝に「河内皆怪其奏、以爲神速（河内皆其の奏を怪しみ、以て神速と爲す。）」とある。夕立のあつた翌日、朝になって田を見ると、もう田植えは終わっていた。

### 【現代語訳】

#### 雨のあと

雨を待つて稲の苗を移そうとして、まだ作業は終わらない。

夕立がやってきて、水は田に満ち満ちている。

朝になって驚いた、農作業のなんと速いことか。

天の果てまで青々とした田が続いている。

○ 三月二十一日聞鶯（三月二十一日鶯を聞く）〔卷九〕

煙雪濛濛山不晴

煙雪濛濛として山晴れず。

遷鶯出谷始嚶嚶

遷鶯谷を出でて始めて嚶嚶。

宛似尋花人值雨

宛も花を尋ぬる人の雨に値ふに似たり。

松陰避濕轉來聲

松陰濕を避けて轉り來たる聲。

（脚韻下平声八庚、晴・嚶・聲）

【語注】

。煙雪：煙のように降る雪。細かい雪。杜甫の「韋諷錄事宅觀曹將軍畫馬圖歌（韋諷錄事の宅にて曹將軍畫ける馬の圖を觀る歌）」に「其餘七匹亦殊絶 迴若寒空動煙雪（其餘七匹も亦殊絶、迴として寒空に煙雪動くがごとし）」とある。

。遷鶯出谷始嚶嚶：「遷鶯」は黄鳥（ちようせんうぐいす・小鳥のうぐいす）がひくい谷間から喬木にのぼる。「始」はやつとゝしたばかり。『玉台新詠』卷一「古詩爲焦仲卿妻作（古詩、焦仲卿の妻の爲の作）」に「年始十八九 便言多令才（年始めて十八九、便言にして令才多し。）」とある。「嚶嚶」は、鳥が仲良くさえずり合う声。『毛詩』小雅「伐木」に「伐木丁丁 鳥鳴嚶嚶（木を伐ること丁丁たり。鳥鳴くこと嚶嚶たり。）」とある。

。値：でくわす。『史記』酷吏列伝に「寧見乳虎、無値寧成之怒。（寧ろ乳虎を見るとも、寧成の怒りに値ふ無かれ。）」とある。

【現代語訳】

三月二十一日に鶯を聞く

細かい雪が降って辺りは暗く、山は晴れない。

鶯が谷から出てやっとホーホケキヨと鳴いたばかりなのに。

まるで花を見に来た人が雨に遭ったかのようにだ。

松かげで、濡れるのを避けてさえずる声が聞こえる。

○ 春雨（春雨）〔九卷〕

彌天膏澤降 天に彌りて膏澤降り、

蒸地暖氣横 地を蒸して暖氣横たはる。

林隔輕綃帳 林は隔つ、輕綃帳、

山遮薄紙屏 山は遮ぎる、薄紙屏。

樹梢初變色 樹梢初めて色を變じ、

野物盡流形 野物盡く形を流く。

餘雪兼櫻白 餘雪櫻を兼ねて白く、

平煙與麥青 平煙麥と青し。

何煩假葢事

何ぞ煩はさん、葢かさを假かるの事、

聊趣墊巾行

聊うながか趣うながす、巾てんを墊てんするの行。

如待新晴日

如し新晴の日を待たば、

雨中花或零

雨中に花或いは零おちん。

○韻字 横・屏・形・青・行・零（庚韻青韻、通押）

【語注】

。彌天膏澤降：「彌天」空に満ちる。空一面にわたる。「膏澤」はめぐみの雨。恩恵の意にもなる。『孟子』離婁下に「諫行言聽。膏澤下於民。（諫行はれ言聽かれ、膏澤かうたく民に下る。）」とある。春なので、空から雨が降るようすをめぐみの雨と表現した。

。輕綃帳：「綃帳」はあやぎぬの幕、うすぎぬのとばり。綃はあやぎぬ、うすぎぬ。唐、李賀の「美人梳頭歌（美人頭くしけつを梳くしるの歌）」に「西施曉夢綃帳寒 香鬢墮髻半沈檀（西施の曉夢、綃帳せうちやう寒し、香鬢かうぐわん墮だけい髻、半ば沈檀ちん）」とある。

。薄紙屏：「紙屏」は紙張り屏風。

。流形：自然がさまざまな形となつてあらわれる。『周易』「乾」象伝に「雲行雨施、品物流形。（雲行き雨施し、品物形を流く。）」とある。

。平煙與麥青：「平煙」は一面にたなびいた煙。「麥」は穂が出る前の、青々とした麦。横にたなびく煙が麦の色を映して青い。

。何煩假葢事：「假」は借りる。「葢」は傘。どうして傘を借りるような煩わしいことなどでしょうか、いやし

ない。

。聊趣墊巾行：「聊」はとりあえずは。「趣」はうながす。「墊巾」は頭巾の角を折る。「墊角巾」てんかくきんの故事による表現。漢の郭泰は雨に遭って頭巾の一角が折れてしまった。このことから、「墊角巾」てんかくきん（一角を折った頭巾）の語ができた。『漢書』郭泰伝に「泰嘗遇雨、巾一角墊。時人乃故折巾一角、以爲林宗巾。（泰嘗て雨に遇ひ、巾一角墊す。時人乃ち故ら巾一角を折り、以て林宗巾と爲す。）」とある。林宗は郭泰あざなの字である。同行者に雨に濡れてもいいからと促している。

### 【現代語訳】

#### 春の雨

空一面からめぐみの雨が降り、

地面を蒸して暖気が横たわっている。

林はへだてている、軽いうすぎぬの帳とほりのように。

山はさえぎっている、薄い屏風のように。

樹木の梢は色が変わりはじめ、

野原の物はすべてが形をあらわす。

消え残った雪は桜の花と一緒に白く、

一面にたなびく煙は麦の色を映して青い。

傘を借りることなど煩わしい、  
とりあえず濡れるに任せて行こう。  
もし雨上がりを待っていたなら、  
雨に咲く花は、落ちてしまいかもしれないのだ。

【補説】

この詩の詩形は排律である。全六聯のうち、最後の聯以外はすべて対句で構成されている。

○ 花下偶吟（花の下にて偶々吟ず）〔巻九〕

緋桃花逐白桃遅 緋桃の花は白桃を逐ひて遅し。

丹奈枝交素李垂 丹奈の枝は素李に交はりて垂る。

越山風信非無次 越山の風信、次無きに非ず。

誰道衆芳開一時 誰か道ふ、衆芳一時に開くと。

（脚韻上平声四支、遅・垂・時）

【語注】

。緋桃…赤色の桃。深紅色。

。丹奈…林檎の一種。べにりんご。からなし。奈は柰。『蒙求』「王祥守柰」に「有丹柰結實（丹柰實を結ぶこ）

と有り。」とある。奈は奈の譌字。

。素李…白い李。

。越山…越後の山。

。風信…風が季節に応じてくること。おとづれ。季節ごとの風。たより。

。衆芳…多くの芳しい花。

【現代語訳】

花の下でたまたま詠じた

赤い桃の花は、白い桃を追いかけて遅く咲く。

べにりんごの枝は、白い李に交わって垂れている。

越後の山の便りは次がないわけではない。

いったい誰が言うのか、たくさん芳しい花が一度に開くと。

○ 挿秧（挿秧） その一 「巻九」

馬鋏搖曳跡縱横

馬鋏搖曳、跡縱横。

田回無塊泥已平

田回、塊無くして泥已に平らかなり。



吉日分秧茹蘆隊

吉日、秧を分つ茹蘆じよりよの隊。

凱風四起小謠聲

凱風がいふう、四もに起こる小謠聲。

(脚韻下平声八庚、横・平・聲)

【語注】

。馬鍬…農具。うまぐわ。田を鋤き返したあと、地をかきならす。

。茹蘆隊…「茹蘆じよりよ」はあかね。「毛詩」鄭風「東門之墀とうもんしせん」に「東門之墀茹蘆在阪せん（東門の墀、茹蘆阪さかに在り。）」

とある。「茹蘆隊」は、あかね櫛くしの女たちの意。横一列に隊列を組み、並んで田植えをするのでこう表現した。

。凱風…南風。初夏に吹くそよ風。「毛詩」邶風はいふう「凱風」に「凱風自南吹彼棘心せん（凱風南よりし、彼の棘心を

吹く。）とある。

【現代語訳】

田植え その一

馬ぐわを引いて田をかきならす、縦に横に。

田には塊かたまりがなくなり泥はもう平らになった。

吉日に、あかね櫛くしの女たちは隊列を組み苗を分けて植えていく。

初夏のそよ風が吹き、四方からわき起こるよ田植え歌が。

挿秧 さふあう その二

晴風一月雨來遲

晴風一月、雨來ること遅し。

決盡山陂秧始移

山陂さんびを決盡けつじんし秧始めて移す。

願假弓弰穿岸手

願ねがはくは弓弰きゆうせん穿岸せんがんの手を假り、

飛泉涌出及斯時

飛泉涌出、斯の時に及ばん。

(脚韻上平声四支、遅・移・時)

【語注】

。晴風：晴れた日の風

。山陂：「陂」は池の堤。山の池の堤。

。弓弰穿岸：「弓弰」は弓末、ゆはず。源將賴義が弓弰によって岸を穿つと靈水が湧き出たという故事（「源賴義靈泉を得て官軍の渴を助く」）による表現。また、『後漢書』列傳卷十九、耿弇列傳第九「國弟子」にも

「聞昔貳師將軍拔佩刀刺山、飛泉涌出。（聞く、昔貳師將軍佩刀を抜き山を刺せば、飛泉涌出すと。）」とある。

「三余集」頭注に「源將賴義故事與貳師之事似（源將賴義の故事と貳師の事と似る。）」とある。

【現代語訳】

田植え え その二

晴れて風が吹く日が一月ひとつき続き、雨はなかなか来ない。山の池の堤をすっかり切つて苗を初めて移した。できることなら弓ゆはずで岸を穿つた源頼義の手を借り、この時に飛泉が湧き出してほしいものだ。

○ 雨後（雨後）うご その一 「巻九」

三日甘霖忽夕陽 三日の甘霖かんりん、忽ち夕陽。

青苗出色已成秧 青苗せいべう出色しき已成いじ秧やうと成る。

鳴蜩報霽聲如喜 鳴蜩めいとう報ほう霽せい聲せい如ごと喜とし。

延領天邊唯莽蒼 領くひを延ひけば天邊あまのへ唯ただ莽まう蒼さう。

（脚韻下平声七陽、陽・秧・蒼）

【語注】

。甘霖：時になつて降る雨。よい雨。『三国志演義』第二九回に「吾求三尺甘霖、以救萬民。（吾三尺の甘霖を求め、以て萬民を救はん。）」とある。

青苗：青い苗。謝朓の「賦貧民田（貧民の田に賦す）」に「舊埒新塍分、青苗白水映（舊埒新塍に分かれ、青苗白水に映ず）」とある。

鳴蜩：鳴くひぐらし。『毛詩』幽風「七月」に「四月秀葷五月鳴蜩（四月秀葷、五月鳴蜩）」とある。

延領天邊唯莽蒼：「延領」は首を引く。期待の気持ちをもつて遠くを眺める。「引領」に同じ。『孟子』梁惠王上に「如有不嗜殺人者、則天下之民、皆引領而望之矣。（如し人を殺すことを嗜まざる者有らば、則ち天下の民、皆領を引きて之を望まん。）」とある。「天邊」は天空のほとり。空の果て。「莽蒼」はあおあおとした色。雨が降った後、晴れの日が続くことを願って空の様子を見つめている。

### 【現代語訳】

#### 雨のあと

三日雨が続いてたちまち日が沈んでゆく。

青い苗は色が濃くなり苗らしくなった。

蜩が鳴く声は、晴れることを喜んで知らせているかのようにだ。

首を伸ばして眺めると、空の果てまでずっと青々としている。

#### 雨後 その二

海畔夕陽山畔雨

海畔は夕陽、山畔は雨。

半天流墨半天藍

半天は墨を流し、半天は藍。

日光私照何如此

日光の私照、何ぞ此のごとし。

海氣易晴山易陰

海氣晴れ易く、山陰り易し。

(脚韻下平声一三覃、藍・陰)

【語注】

。海畔夕陽山畔雨：「海畔」は海辺。海岸。唐、柳宗元の「與浩初上人同看山寄京華親故（浩初上人と同一山を看て京華の親故に寄す。）」に「海畔尖山似劒鋌（海畔の尖山、劒鋌に似る。）」とある。「山畔」は山のほとり、山際。三餘堂は山を少し登った所に建てられていたので、遠くまで眺めることができた。

。半天：天の半分。杜甫の「石櫃閣」に「季冬日已長 山晚半天赤（季冬日已に長く、山晚れて半天赤し。）とある。

。流墨：蘇軾の「六月二十七日望湖樓醉書五絶（六月二十七日望湖樓の醉書五絶）」其一に「黒雲翻墨未遮山（黒雲、墨を翻して、未だ山を遮らず。）」とある。

。私照：偏つててらすこと。『礼記』孔子閒居に「天無私覆、地無私載、日月無私照。（天は私覆無く、地は私載無く、日月は私照無し。）」とある。

。山易陰：「陰」はくもる、かげる。『毛詩』邶風「谷風」に「習習谷風以陰以雨（習習たる谷風、以て陰り以て雨ふる。）」とある。

【現代語訳】

雨のあと その二

海辺は夕陽、山際は雨。

空の半分は墨を流したように暗く、半分は藍色。

日の光の照らし方はどうしてこんなに偏っているのか。  
海辺の気は晴れやすく、山は曇りやすい。

○ 秋晩（秋晩）〔巻九〕

霜野風光十里間

霜野の風光、十里の間。

夕陽幽眺可怡顔

夕陽の幽眺、顔を怡ばすべし。

田無遺秉荒荒豁

田に遺秉無く荒荒として豁く、

堤有閑花處處斑

堤に閑花有りて處處斑なり。

僧笠影歸黃葉寺

僧笠、影歸る、黄葉の寺。

鹿鳴聲斷白雲山

鹿鳴、聲斷つ、白雲の山。

枯景雖寒殊有趣

枯景寒しと雖も殊に趣有り、

淡求詩料自忘還

詩料を淡求して自ら還るを忘る。

(脚韻上平声一五刪、問・顔・斑・山・還)

【語注】

。秋晚：秋が深い。秋の終わり。秋の暮れ。

。霜野：霜の降りた野原。霜枯れの野。唐、李商隱の「楚澤」に「夕陽歸路後霜野物聲乾（夕陽歸路の後、霜野に物の聲乾く。）」とある。

。風光：日が出て風が吹き、草木に光色あること。風景、ながめ。

。夕陽幽眺可怡顔：「幽眺」は静かなながめ。「怡顔」は顔をほころばす。うれしそうな顔つきをする。陶淵明の「歸去來兮辭（歸去來の辭）」に「引壺觴以自酌眄庭柯以怡顔（壺觴を引きて以て自ら酌み、庭柯を眄みて以て顔を怡ばす。）」とある。夕陽が沈む秋の田園風景を好ましいと感じている。

。田無遺秉荒荒豁：「遺秉」は取り残しの稲の束。『毛詩』小雅「大田」に「彼有遺秉此有滯穗（彼に遺秉有り、此に滯穗有り。）」とある。「荒荒」は薄暗いさま。「豁」はからつと開けて広い。広々としている。陶淵明の「桃花源記」に「復行數十歩、豁然開朗。（復た行くこと數十歩、豁然として開朗なり。）」とある。平らに広がる田園の夕暮れの情景。

。閑花：閑雅に咲いた花。しずかでしとやかな花。

。處處：ところどころ。また、至る所。

。斑：種々の色が混じった模様。

。詩料：詩を作る材料。南宋、楊万里、「過太湖石塘（太湖の石塘を過ぐ）」三首（その三）に「松江是物皆詩料 蘭槩穿湖即水仙（松江は是れ物皆詩料、蘭槩もて湖を穿つは即ち水仙なり。）」とある。

【現代語訳】

秋の夕暮れ

霜枯れの野原の景色が十里の間に広がっている。

夕陽が沈んでゆく景色は顔をほころばせる。

田には取り残された稲はなく、夕暮れのなか平らに広がっている。

堤にはしとやかに咲いた花があり、ところどころ色が混じっている。

笠をかぶった僧が影を引いて帰って行く、黄葉の寺へと。

鹿の鳴く声もすっかり止んでしまった、白雲の山には。

枯れた景色は寒々としているが、特別趣がある。

詩の題材をほんやり探していて、帰るのを忘れてしまった。

○ 加納望八谷山（加納にて八谷山を望む）〔巻九〕

吾居近接彼山趾

吾が居近く接す、彼の山趾。

朝夕忸看無可詩

朝夕忸れ見て詩すべき無し。

適在他方見全體

適々<sup>たまたま</sup>他方<sup>たはう</sup>に在りて全體を見る。

始開生面覺新奇

始めて生面を開きて新奇を覚ゆ。



懸巖飛瀑明王水

懸巖の飛瀑、明王の水。

半嶺枯松天狗枝

半嶺の枯松、天狗の枝。

歴覽向人遙指點

歴覽して人に向ひて遙かに指點す。

第三峰下小茅茨

第三峰下の小茅茨。

(脚韻上平声四支、詩・奇・枝・茨)

【語注】

。加納：地名。現在の新潟県柏崎市加納。

。八谷山：八石山。前出。

。山趾：「趾」はあし、ねもと。山すその意。

。開生面：「生面」は生き生きとした顔。新機軸。今まで見られなかった方面。杜甫の「丹青引」に「凌煙功臣少顏色將軍下筆開生面（凌煙の功臣顏色少なり。將軍筆を下せば生面を開く。）」とある。

。懸巖飛瀑明王水：「懸巖」は高くきりたった崖。「飛瀑」は高所から落ちる滝。八石山中の善根の不動滝は不動明王の滝として古來信仰されている。

。歴覽向人遙指點：「歴覽」は次から次へと巡り歩く。「指點」は一々指さすこと。ぐるぐる歩いて場所を探しながら指さして説明する。

。第三峰下：八石山の山頂は上八石、中八石、南条八石（下八石）の三峰に分かれている。南城の三餘堂は下八石の麓に建てられていた。

。小茅茨：茅茨はチガヤとイバラ。チガヤとイバラで葺いた屋根。割注に「乃吾居（乃ち吾が居なり。）」とある。

【現代語訳】

加納で八谷山を望む

私の住まいはあの山すそ近くにある。

朝晩に親しみ見ていたが、詩にするようなものはなかった。

たまたま別方向にいて、山の全体を見た。

始めて新生面を開いて、珍しさを感じた。

懸崖の飛瀑、それは不動明王の水、

山腹の枯松、それは天狗の住処すみかの枝。

ぐるぐる歩き、人に向かつて遙かに指さす。

第三の峰の下、我が小さな茅葺き屋根を。

○ 仲春遊山記（仲春遊山の記） その一〔卷十〕

明明餘雪映山樁

明明たる餘雪山樁さんちんに映なず。

虚銃響高林有人

虚銃の響き高くして人有り。

一驚不待韓盧逐

一驚韓盧の逐あつを待たず

飛出斑毛東郭媿

飛び出だす、斑毛はんまうの東郭媿とうくわくしゆん。

(脚韻上平声一一真、椿・人・媿)

【語注】

。明明…非常に明らかなさま。『毛詩』小雅「小明」に「明明上天 照臨下土(明明たる上天、下土を照臨す。)」とある。

。虚銃…脅して獲物をおびき出すため仮に銃を撃つことか。

。一驚…一は、ちよつと、すこし。動作がほんの少しなされたことを表す。

。韓盧…戦国時代、韓国から出た黒毛の俊犬の名。『戦国策』秦策に「范雎曰、以秦卒之勇、車騎之多、以當諸侯、譬若馳韓盧而逐鶩兔也。(范雎曰く、秦卒の勇、車騎の多きを以て、以て諸侯に當たれば、譬へば韓盧を馳せて鶩兔を逐ふがごときなり。)」とある。

。東郭媿…兔の異名。『新序』雜事に「昔者齊有良兔、曰東郭媿。盖一旦而走五百里(昔者齊に良兔有り、東郭媿と曰ふ。盖し一旦にして五百里を走る。)」とある。また、韓愈の「毛穎伝(毛穎の伝)」に「居東郭者曰媿。狡而善走、與韓盧爭能、盧不及。(東郭に居る者を媿と曰ふ。狡にして善く走り、韓盧と能を争ひ、盧及ばず。)」とある。

【現代語訳】

仲春に山に遊んで記す その一

くつきりと消え残る雪が山の椿に映じている。

獲物を脅す銃声が林に響く、人がいるらしい。

びくつと驚いて、韓盧が追いかける前に、

まだら毛の東郭とうくわく媿くわいが飛び出だしてきた。

仲春遊山記 その二

鷺しやうせう在松梢不露形 鷺松梢しやうせうに在りて形を露はさず。

時時鼓喙じじくわい作呵鳴 時時喙じじくわいを鼓して呵鳴かめいを作す。

恠わらひ來頭上天狗笑 恠わらひしみ來たる、頭上天狗の笑かと。

飛下溪田翼有聲 溪田に飛下して翼に聲有り。

(脚韻下平声八庚、鳴・聲)

【語注】

。鼓喙：喙を振り動かす。

。呵鳴：「呵」はわらう。笑っているかのような鳴き方。

。恠來：あやしむ。來は助字。

。翼有聲：『毛詩』大雅「文王有聲」に「文王有聲 通駿有聲（文王聲有り、通こに駿おほいに聲有り）。」、また、蘇

軾の「後赤壁賦」に「江流有聲、斷岸千尺、山高月小、水落石出。（江流聲有り、斷岸千尺、山高月小に、

水落ち石出づ。）」とある。

【現代語訳】

仲春に山に遊んで記す その二

鷺が松の梢に留まっているが姿を現さない。

時々喙を動かしてカラカラと音をたてる。

おや、頭の上で天狗が笑っているのかと思う。

谷間の田んぼに降りてきて翼をバタバタさせた。

○ 山遊絶句（山遊絶句）その一 「卷十」

水光山影又相迎 水光山影又相迎ふ。

久矣吾節不向城 久し、吾が節城に向はざること。

奪却裨謀野法 奪却す、裨謀野に謀るの法。

出遊聊此助吟情 出遊聊か此に吟情を助く。

（脚韻下平声八庚、迎・城・情）

【語注】

。山遊：山で遊ぶ。山とはおそらく八石山のこと。南城の三餘堂はその麓にあった。

。水光山影又相迎：「水光」は水面の輝き。蘇軾「前赤壁賦」に「白露横江、水光接天（白露江に横たはり、

水光天に接す。」とある。ここでは、八石山から眺めた日本海のこと。

。久矣吾節不向城：「節」はみさお、道義上守るべき節操、節義。「城」は町。南城は八石山から海に日本海に面した柏崎の町を見て、この感慨を漏らしている。

。奪却裨諶謀野法：「裨諶」は春秋時代の鄭の大夫。「論語」憲問に「爲命、裨諶草創之。（命を爲るは、裨諶之を草創す）」とある。裨諶は野で謀をするとうまくいったという。『左伝』襄公三十一年に「裨諶能謀。謀於野則獲。謀於邑則否。（裨諶能く謀る。野に謀れば則ち獲。邑に謀れば則ち否らさず）」とある。野に出てうまく詩を作る才能がないことを、裨諶の故事を使いながら「奪却す」と述べた。

。出遊聊此助吟情：「聊」はしばらくの間、とりあえずは。「吟情」は詩歌を作る心。才能がないので、山遊びをして題材を得ることが詩歌を作ることの手助けになるということ。

### 【現代語訳】

山あそび その一

海の輝きと山の影とが互いに迎えあう。

久しいことよ、自分の節操として町に行こうとしなくなってから。

裨諶が野で謀をなしたような巧みな才能は、もう私にはない。

山を歩くことが、なんとかここで詩を作る助けとなるのだ。

山遊絶句 その二

一峰高揖萬峰蹲 一峰高く萬峰を揖して蹲り、

大壑倒傾羣壑奔 大壑倒傾して羣壑奔る。

偶對此奇遊易倦 偶々此の奇に對して遊び倦み易し。

不堪山水應酬煩 山水應酬の煩に堪へず。

(脚韻上平声一三元、蹲・奔・煩)

【語注】

。一峰高揖萬峰蹲：「揖」は両手を組んで会釈する。『論語』述而に「揖巫馬期而進之。(巫馬期を揖して之を進む。)」とある。三餘堂のあつた八石山にはいくつか峰がある。その眺望を詠っている。

。大壑倒傾羣壑奔：「壑」は谷。大きな谷がさらに小さな谷へとつながっているさま。その谷から流れる川がやがて大きな川へと流れ込むことになる。

。偶對此奇遊易倦：「倦」はうむ。疲労する。つかれる。「易」はしやす。簡単にししがちだ。気軽な山遊びのつもりだったが、たまたま自然の景觀に接して遊びの気分はしぼんでしまった。

。山水應酬：「山水」は山と川。「應酬」は接待する、応対する。

【現代語訳】

山あそび その二

一つの山は高くそびえて、多くの山に会釈して座り、大きな谷は切り立ち、小さな谷がいくつも続いて川へとつながってゆく。たまたまこの珍しさを前にして遊びの気分はしぼんでしまった。山と川とが織りなす景色を見ていて疲れてしまった。

山遊絶句 その三

徐行就麓入中林 徐行麓に就きて中林に入る。

左右兩山相對嶽 左右の兩山相對して嶽し。

莫是谷神玄牝窟 是れ谷神玄牝の窟なる莫からんや。

日中無影自深深 日中影無くして自ら深深たり。

(脚韻下平声一二侵、林・嶽・深)

【語注】

。入中林：「中林」は林の中、林中。『周易』に屯に「即鹿無虞、惟入于林中。（鹿に即くに虞無く、惟だ林中に入る。）」とある。

。兩山相對嶽：「嶽<sup>きん</sup>」は高い。『左伝』僖公三十二年の杜注に「兩山相對嶽。（兩山相對して嶽<sup>たか</sup>し。）」とある。



。谷神玄牝崩：『老子』第六章に「谷神不死、是謂玄牝。（谷神死せず、是を玄牝と謂ふ。）」とある。「谷神」は谷の空虚な所、「玄牝」は万物を生じる本源。崖は突き出て高い山のさま。  
。深深：静かでかすかなさま。奥深くうすぐらいさま。

### 【現代語訳】

#### 山あそび その三

ゆっくりと歩いて麓に着き、林の中に入った。

左右の山は高く向かい合っている。

これはさながら谷神玄牝の山のさまではなからうか。

日中でも影はなく奥深くうすぐらい。

#### 山遊絶句 その四

穿過隘口出林來 隘口を穿過して林を出て來たる。

豁似洞庭鉅野開 豁として洞庭鉅野の開くに似たり。

吟望眼明天盡處 吟望眼明なり、天の盡くる處。

偏欽雲夢并吞才 偏に欽す、雲夢并吞の才。

(脚韻上平声一〇灰、來・開・才)

【語注】

。穿過：横切る、通り抜ける。突きささる。

。豁：からつと開けて広い。前出（「秋晚」卷九）

。洞庭鉅野：洞庭は洞庭湖。湖北省、湖南省にまたがる。鉅野は沢の名。山東省鉅野県の北にあった。『千字文』に「こんちけつせき昆池碣石、きよやどうてい鉅野洞庭」とある。

。吟望眼明天盡處：詩を作ろうとして景色を眺めると、大空の果てまではつきり見えるというようす。

。偏欽雲夢并吞才：「偏」は特別に。もつとも。「欽」はつつしむ。尊敬する。敬う。「雲夢」は湖北省、湖南省にわたる沼沢地帯の総称。「并吞」は合わせ容れる、すべて容れる。司馬相如の「子虚賦」に、「吞若雲夢者八九、於其胸中、曾不帶芥。うんぼう（雲夢のごとき者八九を吞むも、其の胸中に於て、曾て帶芥せず。）」とある。

。「才」とは杜甫の才能のこと。『詩人玉屑』卷十四「胸中吞幾雲夢（胸中に幾雲夢を吞む）」に「洞庭天下壯觀。自昔騷人墨客、題之者衆矣。…至讀子美詩、則又不然。吳楚東南拆、乾坤日夜浮。不知少陵胸中吞幾雲夢也。

（洞庭は天下の壯觀なり。昔より騷人墨客、之に題する者衆し。…子美の詩を讀むに至りては、則ち又然らず。吳楚東南に拆け、乾坤日夜浮かぶ。少陵の胸中に幾雲夢を吞むかを知らざるなり。」とある。林から視界の開けた所に出てきて詩を詠もうとした南城は、その時洞庭湖を前にしてスケールの大きな詩を詠んだ杜甫のことを思い出している。

【現代語訳】

山あそび その四

狭い道を通り過ぎ、林から出てきた。

突然カラッと、まるで洞庭鉅野どうていきよに出たように視界が開けた。

眺めを詩に詠もうとすると、大空の果てまではつきり見える。

本当に尊敬することだ、杜甫の雲夢うんぼうを呑むがことき優れた才能は。

○ 村笛そんてき（村笛）〔卷十〕

不是漁翁不牧童 是れ魚翁ならず牧童ならず。

誰吹山郭夕陽中 誰か吹く、山郭さんくわく夕陽の中。

三弄雖非悲壯曲 三弄悲壯の曲に非ずと雖も、

天邊飛散一行鴻 天邊飛び散ず、一行いっかうの鴻。

（脚韻上平声一東、童・中・鴻）

【語注】

。漁翁：漁師のおやじ。柳宗元の「漁翁」に「漁翁夜傍西巖宿 曉汲清湘燃楚竹（漁翁夜西巖せいがんに傍ひて宿る、  
曉に清湘を汲み楚竹を燃く）」とある。

。牧童：牛飼いの少年。牧畜を行う子ども。杜牧の「清明」に「借問酒家何處有 牧童遙指杏花村（借問す、酒家何れの處にか有る。牧童遙かに指さす、杏花村。）」とある。

。山郭：山村。やまざと。杜牧の「江南春（江南の春）」に「千里鶯啼綠映紅 水村山郭酒旗風（千里鶯啼きて綠紅に映ず。水村山郭、酒旗の風。）」とある。

。天邊飛散一行鴻：「弄」は樂器を演奏する。「天邊」は大空のほとり、空の果て。また遠隔の地。杜甫の「江月」に「天邊長作客 老去一霑巾（天邊長く客と作り、老去って一に巾を霑す。）」とある。悲しい曲が吹かれたことで、ヒシクイは散り散りに空の果てに飛んで行った。

### 【現代語訳】

#### 村の笛

漁翁ではないし牧童でもない。

いったい誰が吹いているのか、夕陽がさす山里の中で。

三回曲が吹かれると悲壯の曲というわけではないのに、

大空で散り散りに飛んで行ったよ、一行のヒシクイたちは。

○ 鯖石川上作（鯖石川上の作）〔卷十〕

四時閑翫莫如秋

四時の閑翫かんぐわん、秋に如くは莫し。

吟笠荷來又喚舟

吟笠荷ぎんりょうひ來りて又舟を喚ぶ。

丹碧焜煌山益飾

丹碧焜煌たんぺきこんくわうとして山飾やまを益し、

晴煙縹縹水明樓

晴煙縹縹へうへうとして水樓みずに明らかなり。

平川曠野宜移歩

平川曠野へいせんくわうや宜しく歩を移すべく、

釣渚弋林似待遊

釣渚弋林てうしよくりん遊びを待つに似たり。

日暹崦嵫容易晚

日暹崦嵫えんしに暹りて容易せまに晩く。

餘光未盡且歸休

餘光未だ盡はきざるに、且た歸休せん。

【語注】

。鯖石川：三餘堂のあった南条村を流れる川。日本海に注ぐ。釣りが好きだった南城はよくこの川で魚釣りをしていた。

。閑翫：ひまなさま。のんびりと遊ぶ。

。丹碧焜煌山益飾：「丹碧」は赤と青。「焜煌」はかがやく。赤や青の花が咲いて山が美しくかがやいているようす。

。晴煙縹縹水明樓：「晴煙」は晴れた日のかすみ。「煙」は煙状のもの。雲、霧、もや。錢起の「酬長孫繹藍

溪寄杏（長孫繹の藍溪にて杏を寄すに酬ゆ）」に「清香和宿雨 佳色出晴煙（清香宿雨に和し、佳色晴煙に出づ）」とある。「縹縹」は軽く挙がるさま。ひるがえる。霞が浮かび、鯖石川の流れが高殿を映すように

明らかだという情景。

。平川曠野宜移歩：「平川」は平坦な川。平らで静かに流れる川や、広々とした野原は散策するのにちょうどよいということ。

。釣渚弋林：「釣渚」は魚を釣りして楽しむころ。「弋林」は人々が鳥を射るはやし。南朝宋、鮑昭の「蕪城賦（蕪城の賦）」に「弋林釣渚之館（弋林釣渚の館）」とある。

。崦嵫：山名。古、日の入る所と考えられた山。『山海経』「西山経」に「西南三百六十里曰崦嵫之山。（西南三百六十里を崦嵫の山と曰ふ。）」とある。郭璞注に「日没所入之山也（日没して入る所の山なり。）」とある。また『楚辞』「離騷」に「吾令羲和弭節兮 望崦嵫勿迫（吾羲和をして節を弭めて、崦嵫を望んで迫る勿からしむ。）」とある。

。餘光未盡且歸休：「餘光」は日没後に残っている光。「且」は意味を強める助字。『莊子』齊物に「誰獨且無師乎。（誰か獨り且た師無からんや。）」とある。「歸休」は家に帰って息う。『漢書』列伝第五十一、孔光伝に「沐日歸休、兄弟妻子燕語、終不及朝省政事。（沐日歸休し、兄弟妻子と燕語し、終に朝省政事に及ばず。）」とある。

## 【現代語訳】

鯖石川<sup>さばいしがわ</sup>岸边での作

四季の中で、のんびりと遊ぶのは秋が一番だ。

笠をかぶった者が歌を歌い、荷を背負ってやって来て舟を呼んでいる。

赤や青の花々は焜煌と輝いて、山は飾りを増し、

晴れた日の霞は縹縹と浮かんで、川は高殿に明らかである。

静かに流れる川と広々とした野原は、散策にちょうどよく、

釣り場所と鳥を射る林は、まるで遊びを待っているようだ。

日は崦嵫の山に近づいて簡単に暮れてゆく。

日の光はまだあるが、さあ家に帰って休むことにしよう。

○ 雪景（雪景）〔卷十〕

積雪羣山鶴鶴松

積雪の羣山、鶴鶴たる松。

晴來却似白雲封

晴來たり却って白雲の封ずるに似たり。

天色雖青難染水

天色青しと雖も水を染め難し。

玄波鱗起作廬龍

玄波鱗起して廬龍を作す。

（脚韻上平声二冬、松・封・龍）

【語注】

。鶴鶴：白くて光沢があるさま。『孟子』梁惠王上に「王在靈囿、麀鹿攸伏、麀鹿濯濯。白鳥鶴鶴。」（王靈囿に在れば、麀鹿伏する攸、麀鹿濯濯たり。白鳥鶴鶴たり。）とある。

。白雲：白い雲。『毛詩』小雅「白華」に「英英白雲 露彼菅茅（英英たる白雲、彼の菅茅に露す）。」とある。封：つく、付着する。

。玄波：冬の時期の黒々とした波。『旧唐書』列傳第四十、朱敬則伝に「然後決玄波使橫流、揚薰風以高扇。（然る後玄波を決して橫流せしめ、薰風を揚ぐるに高扇を以てす。）」とある。

。鱗起：晉、郭璞の「遊仙詩」七首、其の二に「閭闔西南來 潛波渙鱗起（閭闔西南より來り、潛波渙として鱗のごと起る。）」とある。

。作廬龍：「三余集」割注に「沈括云、北方名黒水爲廬龍（沈括云ふ、北方黒水を名づけて廬龍と爲すと）。」とある。『夢溪筆談』卷二十四 雜誌一に「余奉使、嘗帳宿其下。山長數十里、土石皆紫黒、似今之磁石。有水出其下、所謂黒水也。胡人言黒水原下委高、水會逆流。余臨視之、無此理、亦常流耳。山在水之東。大底北方水多黒色、故有廬龍郡。北人謂水爲龍、廬龍即黒水也。（余奉使し、嘗て帳して其の下に宿す。山長數十里、土石皆紫黒なり、今の磁石に似る。水の其の下に出づる有り、所謂黒水なり。胡人言ふ、黒水の原下委高、水會て逆流す。余臨みて之を視るに、此の理無し、亦常流のみ。山は水の東に在り。大底北方の水黒色多し、故に廬龍郡有り。北人水を謂ひて龍と爲す、廬龍は即ち黒水なり。）」

## 【現代語訳】

### 雪景色

雪が積もり、山々には松が白く光っている。



晴れた景色の中で、かえって白雲が付いているようだ。  
空の色は青いが川の水を染めるのはむずかしい。  
黒々とした波が鱗のように起こり、廬龍ろりょうとなっている。

【補説】

この詩は典故を使っているので訳したもので分けにくい。しかし、訳を詳しく書くと詩の味わいがそこなわれる。そこでここに説明を加える。この詩は題名のとおり雪景色を描いているが、そこは鯖石川さばいしがわが流れる南条村の田園である。『夢溪筆談』によれば、中国の北方では土石が皆紫黒なので、川は黒くなることが多い。廬龍郡はそういう川のあるところで、廬龍ろりょうと言えば黒水を指す。南城は冬の鯖石川の川面が黒く見えることから、その典故によって黒水の意味で廬龍と言ひ、波を鱗と喩えたのである。

○ 雪中到嘉納作（雪中嘉納かのうに到るの作）〔卷十〕

天埋陂澤作平夷

天陂澤ひたくを埋づめて平夷と作す。

脚下坦然軟玉墀

脚下坦然たり、軟玉墀なんぎよくち。

雪行殊勝泥途惡

雪行殊に泥途の惡しきに勝れり。

寒景却添風致奇

寒景却つて風致を添へて奇なり。

皓皓嶺松連白鶴

皓皓かうかうたる嶺松、白鶴を連ぬ。

明明野水臥玄螭

明明たる野水、玄螭を臥す。

回頭宛想仙人寫

頭を回して宛も想ふ、仙人の寫。

一點微埃曾不縑

一點の微埃曾て縑せず。

(脚韻上平声四支、夷・墀・奇・螭・縑)

【語注】

。嘉納：加納とも書く。前出（「加納にして八谷山を望む」卷九）。

。陂澤：さわ、ぬま。貯水池。陂はつつみ、池。

。軟玉墀：「玉墀」は玉石を敷いた石畳。『玉台新詠』卷五「擬三婦」に「大婦掃玉墀 中婦結羅帷（大婦は

玉墀を掃き、中婦は羅帷を結ぶ。）」とある。

。風致：おもむき。おもしろみ。風趣。風味。『五雜俎』物部三に「京師有薏酒、用薏苡實釀之。淡而有風致。

然不足快酒人之吸也。（京師に薏酒有り、薏苡の實を用ひて之を釀す。淡にして風致有り。然れども酒人の

吸を快くするに足らざるなり。）」とある。

。皓皓：きよい。潔白なさま。『毛詩』唐風「揚之水」に「揚之水 白石皓皓（揚れるの水、白石皓皓たり。）」

とある。

。明明野水臥玄螭：「明明」は非常に明かなさま。「野水」は野原を流れる水。ここでは南条村の鯖石川のこと。

『管子』侈靡に「今使衣皮而冠角、食野草、飲野水、孰能用之。（今、皮を衣て角を冠し、野草を食べ、野水

を飲ましめば、孰か能く之を用ひん。）」とある。「玄螭」の「螭」はみずち。伝説上の角のない黄竜。『楚辭』

遠遊に「玄螭蟲象並出進兮形繆虬而透蛇（玄螭蟲象は並びに出でて進み、形は繆虬として透蛇たり。）」、王

逸注に「螭、龍類也。(螭は、龍の類なり。)」とある。冬の鯖石川さばいしがわは水面が黒く見えることから「黒い螭みずち」と表現した。前作「雪景」の詩、参照。

。宛：さながら。ほとんど。まるでのよう。

。一點微埃曾不緇：「緇」は黒くなる。『論語』陽貨に「不曰白乎。涅而不緇。(白きを曰はずや。涅でうすれど緇しせず。)」とある。来た道を振り返って雪景色を見ての感慨。少しの黒さも残さないほどの真っ白な雪景色であるようす。

### 【現代語訳】

雪の中、嘉納かのうに行った時の作

天は沢を埋めて平らにした。

足の下は平らで広々として、軟らかな玉石を敷いた石畳のよう。

雪の道を行くのは、とりわけ泥道の悪いのよりまさっている。

寒々とした景色は、かえって趣が備わってすぐれている。

白くかがやく峰の松は、白い鶴を連ねている。

くつきりと野を行く川は、黒い螭みずちを横たえている。

振り返って景色を見るとまるで仙人の島のような。

ほんの少しのほこりも今まで黒くなったことはないのだ。